

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## オーストラリア・アボリジニ絵画の画像データベース (特集 画像の世界)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00005930">http://hdl.handle.net/10502/00005930</a>

## ● 画像の世界

# オーストラリア・アボリジニ絵画の 画像データベース

久保正敏

国立民族学博物館

画像データの扱いが容易になって、パソコン上でも画像データベースを簡単に構築できる現在では、人文科学の分野でも画像データベース作りが盛んである。オーストラリア・アボリジニの研究グループに属する筆者も、アボリジニの伝統的絵画である「木皮画」の画像データベースを構築しようと考えている。彼らの絵画は神話と深く結びついているため、そのデータベースを構築すればアボリジニ独特の世界観を解明する手がかりとなるであろう。本稿では、画像データベースを中心に、神話のデータベース、神話や絵画における象徴作用のデータベースを組み合わせ、総合的なデータベース構築の構想とねらいを紹介する。

## 1. はじめに

筆者は、国立民族学博物館を中心とするオーストラリア・アボリジニ研究グループに属している。グループ・メンバーの専門は、民族考古学、社会人類学、言語人類学、人文地理学、民族栄養学、そして筆者のような情報科学など、多岐にわたり、互いの専門をクロスオーバーさせながら現地調査（フィールドワーク）を重ねてきた。調査と並行して、資料収集も進めており、その結果、アボリジニの日常用具や絵画など約一千点が国立民族学博物館に収蔵されるに至っている。

アボリジニ絵画は重要な資料である。後述するように、アボリジニ社会の特徴の一つは彼らの神話に基づく世界観である。アボリジニ絵画は元来、この神話世界を描いたものであるから、外部の人間である我々が彼らの精神世界を知るうえで大きな手がかりとなる。これが、アボリジニ社会を対象とする研究者たちが絵画に関心を寄せる理由である。

本稿では、筆者らが構築を計画しているアボリジニ絵画の画像データベースについて述べる。現在、多方面で画像データベースが作られ応用されているが、民族学(文化人類学)分野における応用のあり方の一例として紹介したい。

画像データベースを構築するためのツールが整備

され、簡単にデータベースが構築できるようになった今日、画像の検索方法、検索結果をどのようなシステムと連携させるか、にデータベース構築の意義が求められる。筆者らは、アボリジニの精神世界を外部に表現するためのメディアとして絵画を捉え、絵画をデータベース化することによって、精神世界を知るだけでなく、彼らの精神世界と外部世界との相互作用を知る手がかりを得たいと考えている。そのため、絵画データベースを中核に、神話や語りのテキストデータベースを互いにリンクさせた総合的なデータベースの構築を目指している。

## 2. オーストラリア・アボリジニ文化の特徴

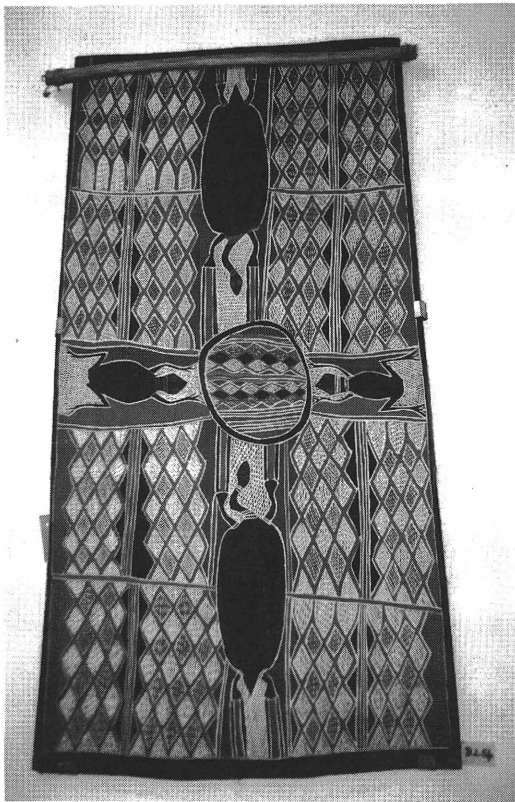
オーストラリアの先住民であるアボリジニの人口は、オーストラリア全人口のおよそ 1.6 パーセントにあたる 28 万である。オーストラリア全土に散在して住んでいるが、大部分は都市化の進んだ南部に住み、白人とあまり変わらない生活を送っている。中央部や北部の農牧地帯に住む人々は主に牛牧に携わり、やはり白人と似た生活スタイルである。

しかし、中央砂漠地域や北部海岸地域などに住む約 3 万人の人々は、1920 年代からこの地域に保護区が設定され始め、白人の立ち入りが制限されるようになったこともあって、現在も狩猟採集の生活スタイルを残している。もっとも、銃と四輪駆動車を用

いる狩猟、太陽発電システム、衛星放送、など近代的システムをどんどん取り入れ、貨幣経済も浸透するなど、物質面では大きな変化を見せている。

とは言うものの精神面では、ドリーミングと呼ばれる宗教体系とそれに基づく儀礼活動の伝統が生きている。昔々の神話時代に一族の土地や文化を創造した精霊たちが今でも自分たちとともに居て、夢を通して自分たちにメッセージを送ってくる、と言う「ドリーミング」の観念は、精神生活のすべてを律している。成人儀礼、葬送儀礼、豊穡儀礼に伴う歌、踊り、絵画はすべて、人間の側から精霊たちへの語りかけである。例えば北部海岸地域においては、ユーカリの木の皮に描かれる「木皮画（樹皮画）」が、町のアートセンターを通して市場に出回り、現金収入源の一つとなっているが、そこに描かれるのはやはり、精霊たちの活躍する神話世界なのである。木皮画の例を写真で示しておく。

アボリジニの親族組織は複雑なことで知られる



イルカラ地域の木皮画

が、彼らの親族の基本単位であるクラン（氏族）は、それぞれ固有の神話を持ち、木皮画の描画スタイルやモチーフもまたクランのアイデンティティに深く結びついている。描画技法は神話とともにクラン毎に代々伝承されていく。神話の舞台である各聖地は儀礼と強く結びついているので、アボリジニの土地権問題もまた、神話世界と切り離して語ることはできない。1993年にオーストラリア連邦政府が「アボリジニ土地権原法」を施行し、アボリジニの先住権を公式に認めたこともあって、アボリジニ自身の土地権意識は一層高まっている。こうした意識変化は、木皮画に描かれるテーマにも影響を及ぼすことであろう。

### 3. 神話・画像に見られる象徴作用

このように、オーストラリア・アボリジニの精神文化にとって大きな意味を持つ絵画とその背景にある神話世界の解明は、西欧社会との接触に伴って大きく変容しつつあるアボリジニ社会を捉えるうえで欠かせない。そのため筆者らは、木皮画と神話に関するデータベースを構築し、それらを関係研究者に公開し基礎資料として共有化することを考えた。我々の構想は、木皮画の画像データベースと神話データベースの背後に、象徴作用のデータベースを置く点に大きな特徴がある。

ある文化の神話を理解するうえで、象徴作用の解明は重要である。オーストラリア・アボリジニの場合、一つの名詞や動詞の表す意味が、表面的解釈から秘技的解釈まで多重の構造を成しており、それが年齢階梯的な知識伝承と対応する、という彼らの文化独特の知識体系を反映して、象徴作用に満ちた神話の多いことが特徴となっている。言い換えれば、象徴作用を把握していないと、単に表面的な解釈にとどまり、彼らの精神世界の深部に踏み込むことができないのである。

例をあげれば、神話を歌う歌にしばしば登場する「ブルローラー（唸り木）」は、各地域のアボリジニ神話で最も重要な精霊である「虹へび」や「男性性」を象徴するし、北東アーネムランド地域の神話では、

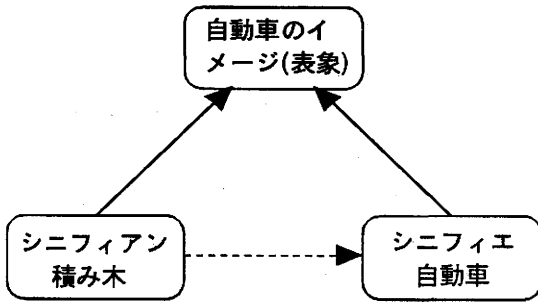


図1. 象徴作用における意味の三角形

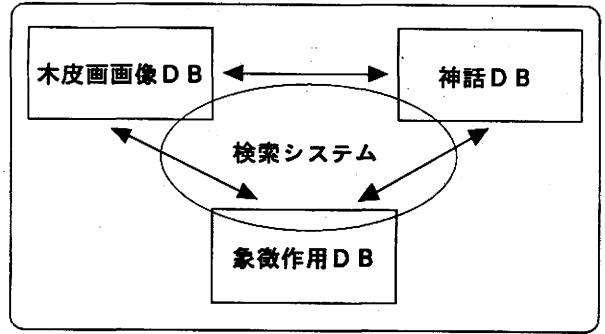


図2. 3つのデータベースと総合検索システム

「亀」や「雲」が「死」を、「海藻」が「火」を象徴する。これら象徴は、神話の語りという言語メディアだけでなく、木皮画やボディペインティングなどの絵画メディアでも用いられ、その地域の住民にとってはその意味が了解可能なものとなっている。

象徴作用は、図1に示すような、いわゆる「意味の三角形」構造によって説明される。すなわち、「意味するもの（シニフィアン）」が直接「意味されるもの（シニフィエ）」を指示するのではなく、第三項である表象（イメージ）を媒介にして間接的に指示するのが象徴作用である。図は、幼児が積み木を自動車に見立てる「ごっこ遊び」を例示したものであるが、この場合、シニフィアンである積み木がシニフィエである自動車を象徴するのは、幼児の頭の中で、第三項として「ともに同じ形や色をしている」という相似性に基づいた見立て、イメージ活動を媒介にしているからである。言い換えれば、この第三項である表象に基づく思考過程こそが象徴作用の神髄であり、そこに含まれるアナロジーや見立てには、「色が同じ」というような単純で普遍的なアナロジーだけではなく、その文化に固有の価値や環境を反映した部分も含まれている。例えば、上の例での、「海藻」→「火」という象徴作用は、ともに「揺らめく」という動きの相似性に基づいた単純なものであるが、「亀」→「死」という象徴作用は、「大きな海亀が起こした嵐で舟が遭難した」という、この地域で伝承されている神話に基づいており、地域文化の成員の間でなければ成立しない象徴作用な

のである。

しかし、ここで注意しておかねばならないのは、象徴作用とは、神話などの言語表現の上でのみ存在するのではなく、絵画表現の上でも存在することである。先述したように、北東アーネムランド地域の木皮画では、その描法もまたクランのアイデンティティと結びついており、白いクロスハッチが灰を表し、赤い色が血や生命を表す、と言ったシンボリズムが存在し、その意味付けは絵画のテーマや文脈によっても変化する。また、中央砂漠地域に特有の「砂絵」においても、幾何学的な文様が文脈に応じた様々な意味に解釈される。すなわち、絵画表現上でも、形や色に象徴作用が認められるのであり、これは独りオーストラリア・アボリジニ文化のみに見られる現象ではない。

このように考えれば、言語表現と絵画表現の両者における象徴作用の調査と整理は、ある地域の精神文化を解明する上で極めて重要であると言える。

筆者らは、木皮画画像データベースに加えて、神話データベースを作成し、これら二つのデータベースの背後にある象徴作用のデータベース作成も試みようと考えている。象徴作用データベースは、神話に現れる言語的な象徴作用だけでなく木皮画表現上の象徴作用に対しても、（シニフィアン、シニフィエ、表象）の三項関係で整理してデータベース化するものである。この象徴作用データベースは、木皮画画像データベース及び神話データベースにリンクされている。これら3つのデータベースを統合的に

検索可能とすることによって、精神文化の総合的な解明に役立つシステムを目指す(図2参照)。

こうしたデータベース構造は、他の地域の精神文化研究に対しても適用できるのではないだろうか。

#### 4. 各部分データベース

個々のデータベースをもう少し詳しく説明する。

##### (1) 木皮画画像データベース

前述したように各クランは神話を持つ。そのストーリーのいくつかの部分を組み合わされて、木皮画に描かれる。木皮画自体には、その作者のプロフィール(出身クラン、その神話の伝承者など)、描かれている動植物、デザインの特徴、描画技法、など、固有の属性が附属している。

筆者らのグループは、1980年代に国立民族学博物館で収集され所蔵されている木皮画の写真を現地に持参して、神話内容の聞き取りを行い、神話内容を項目に分けて記録するという作業を進めている。ここで我々が気づいたのは、語りの内容が必ずしも一定しないことであった。

現地では、インフォーマントたちに写真を見せながら、描かれている神話を語ってもらう。そのクランの成員は神話を知っており、それが成員であるこ

との証であるから、絵画の作者自身でなくても、誰でも神話の内容を語ることができる。ところが、個々の語りの内容は、同一であるとは限らない。語り手個人の持つ価値観や文化的文脈上でのその人の位置に応じて差異があり、また時間的にも変化する。すなわち、語り手や描き手は、文化的文脈及び個人的文脈の枠内から逸脱できない一人なのである。それを個々に記録することはまた、その文化解明にとって大きな意味を持つことになる。

こうした個人的な記録をも含めようとするなら、一つの木皮画と言うオブジェクトには、それ固有の属性のセットが付属するとともに、個人差、時代変化を反映した複数の「語り」がリンクされねばならない(図3参照)。神話は語りを通じてのみ実世界に説明されるから、図の上部に示した神話体系そのものを把握することはできない。この点では、図上部の神話体系を「クラス」と考えれば、図下部の木皮画やその語りは「インスタンス」と言える。あるいは、ソシユール言語学風に言えば、上部を「ラング」、下部を「パロール」と見なすこともできよう。

こうした構造を反映するために、木皮画画像データベースは、図4に示すような構造を持たせる。木皮画に固有な属性を記録した木皮画データベースは画像ファイルにリンクされるとともに、語りデータベース、人物データベースにもリンクされている。

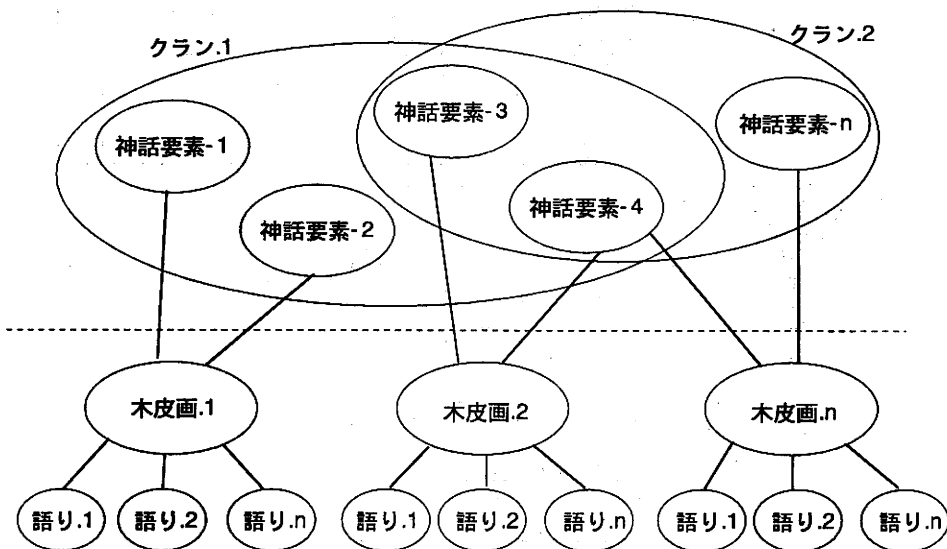


図3. 神話、木皮画、語りの関係

またこの木皮画画像データベースは、木皮画 ID、神話 ID を介して、下記の神話データベース、象徴作用データベースとリンクされることになる。

(2) 神話データベース

神話について語られた個々の「語り」を分析し、プロットやエピソードを構造化する手法を開発してデータベース化する。プロットやエピソードの構造化には、ランガナータン考案のファセット分類法における「基本カテゴリー」を援用するつもりである。

神話を収集してみると、ある神話とプロットは同じだが、登場キャラクターや小道具、場所、時間などが置き換えられたバージョンが数多く存在するこ

とがわかる。こうしたバージョンの同定やグループ化は、文化の変容、伝播を解明する上で貴重な資料となり得る。そこでこの神話データベースでは、プロットやエピソードが相似の神話群に対して、キャラクター、小道具、場所、時間それぞれについての置換対応表を設定しておき、この表もデータベース化しておくことにする。

この置換対応表には、一つの神話群だけではなく、他の神話群に対しても共通な部分を含むことがあり得る。そうした共通の置換操作は、いわば、その文化の成員に共有されている事物間の距離感、言い換えれば、世界観の一部を表現したものと考えることができる。その意味では、置換操作を収集すること

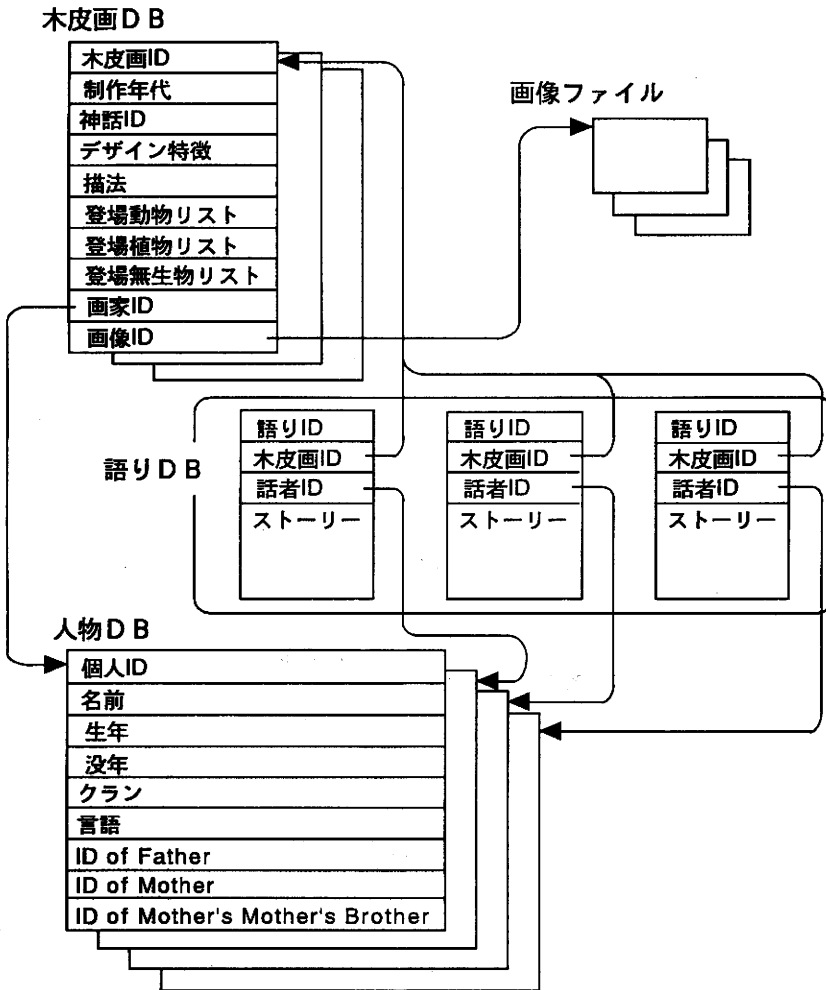


図4. 木皮画画像データベースの構造

は、その文化の世界観を解明するのにも役立つであろう。これはまた、次項の象徴作用における相似性にも関係してくると思われる。

### (3) 象徴作用データベース

言語表現上の象徴作用、及び木皮画表現上の象徴作用を、前述のように(シニフィアン、シニフィエ、表象)の三項関係表で表現したデータベースを作る。象徴作用の媒介項である表象は、シニフィアン→シニフィエという対応関係を説明する原理であり、形や色の相似性、現象の共時性、など、比較的単純で汎用性のあるものから、神話に含まれるエピソードに基づく地域性の強いものまで、いくつかのタイプに分類できるだろう。神話に基づく表象に対しては、該当する神話群へのリンク情報を付加しておく。

表象に関するデータを収集・蓄積し、象徴作用を悉皆的に調査・整理していけば、それは、その地域の文化成員が持つ連想やイメージの世界を表現したものへと発展する可能性があるから、その地域の精神文化の研究に大きく寄与することが期待できる。なぜなら、象徴作用とは、その文化の特徴を最も濃く表現していると考えられるからである。

また、象徴作用は、シニフィアン⇄表象、シニフィエ⇄表象、という論理式から推論されるものである、と解釈できるかも知れない。この論理式に、文化固有の規則性を見いだすことができるならば、「文化における推論規則」のようなものを導き出せる可能性もある。

### (4) 総合検索システム

上記3つのデータベースは互いに深い関係を持つ。「木皮画画像データベース」の語り部分のサブ・データベースは「神話データベース」と、描法のデータは「象徴作用データベース」と、それぞれ関係付けられねばならないし、「神話データベース」は「象徴作用データベース」と深く関わっている。

そこで、データベースを利用した研究を想定すれば、データベース検索だけでなく、相互にリンクを参照でき、さらにリンク先のデータベースを検索できるような、ハイパーメディアとデータベース検索

が統合された総合的検索システムが必須であろう。

こうしたシステムを用いれば、アボリジニ社会における神話の伝承、描画技法の伝承、西欧化の進行や貨幣経済の浸透などの外部世界からの影響、それに伴って生じている土地権意識や女性人権意識の高まりなど内部からの変化の影響、クラン(氏族)間での神話やモチーフの相互影響の程度、文化伝播の推測、などの解明に役立つことが期待できるだろう。また、絵画には決して描かれないテーマや事物などを見出すことができれば、いわば、「負の象徴作用」やタブーと言った表現方法に関する問題など、興味ある研究テーマも浮かび上がるに違いない。

### 5. 対アボリジニ観分析への応用

以上のような画像データベースを元にして、アボリジニ精神世界の解明という目的だけでなく、アボリジニを見る外部世界からのまなごしの解明という、別の応用への展開も考えられる。

近年では、民族学関係者だけでなく美術界においてもアボリジニ絵画への関心が高まり、オーストラリア国内だけでなく、日本など海外各地でも展覧会が開催されるようになった。画集、展覧会の図録、論文などに取り上げられる機会も増えている。美術界や美術市場での注目の増加につれて、絵画自身にも、伝統的なモチーフや描法だけでなく、西欧の画材や描法を用いるモダンな絵画の増加という変化が起きている。

本来はアボリジニ社会内部における神話世界を伝承するためのイントラ・メディアであった絵画が、外部世界との情報交流のためのインター・メディアとなってきたのだ。この場合、土産物市場、展覧会、画集などで好んで取り上げられる絵画のモチーフや描法は、実は、非アボリジニ社会がアボリジニに対して抱いているイメージ、すなわち「アボリジニ観」の反映であると言える。それはしばしば、西欧社会自身が持つ、自然志向、素朴志向、精神世界志向を仮託したものである。こうした観方がまたアボリジニ社会にフィードバックされ、絵画自身に変化を引き起こすことも多いに違いない。換言すれば、絵画

を生み出した一次社会とそれを鑑賞する二次社会との間で相互作用が生じているのである。

こうした相互作用の解明は、民族学の分野で関心が高い「異文化観の再検討」という課題に結びつく、興味深いテーマでもある。そこで筆者らは、絵画データベースの構築とともに、各絵画が、画集や展覧会でどのように取り上げられたかを調査し、データベース化することも計画している。いわば、アボリジニ絵画についての「Citation Index」を作ろうというのである。もとより、悉皆的に引用調査を行うには、民族学研究者だけでなく、美術研究者や美術館との連携が必須であろう。

## 6. おわりに

オーストラリア・アボリジニ絵画を題材にした画像データベースの構想とねらいを述べた。現在は基

礎調査とシステム設計を行っている段階であって、コンピュータ上にシステムを実現しているわけではないが、人文科学分野への画像データベース応用例の一つとして紹介した。画像データベースは、それ自体で完結して利用されるだけでなく、利用目的に見合ったサブ・データベースと有機的に結びつけて利用されると、面白い効果が得られる。

こうしたデータベースが公開され、関心ある研究者の間で共有され、また共通化されるようになれば、更に効果が上がるだろう。ただし、データベース利用者ごとの関心や視点に少しずつズレがある限り、データベースの共通化は必ずしも簡単ではない。共通部分のデータベースと個人データベースとをどのように切り分け、その間のインタフェースをどのように規定しておくか、について念入りの事前の検討が必要なことは言うまでもないだろう。

(くは・まさとし)

### ◆電子媒体図書案内——勉誠社の刊行物より

## 平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記 和泉式部日記 紫式部日記・更級日記 総合語彙索引

西端幸雄・木村雅則・志甫由紀恵 編

本書は、平安時代の代表的な日記文学の翻刻本文編とその語彙索引編とから成る。本文編では『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』の各最善本と思われる写本を翻刻した。原則的に、写本の各行のまま翻刻することによって写本の面影を残した。また、作品毎の各行に通し番号を付けることにより、語彙索引を用いての検索の便を図った。語彙索引編は、上記5作品の使用語彙(約85000語)を見出し語毎に五十音順にまとめ、作品別にその語彙の存在する通し番号を明示した。作成作業をパソコンを使用した作業過程で自動的に付加した各語彙に付随する情報(掛詞・会話用語・和歌用語・音便の別・形容詞のかり活用)をも行番号の前後に付けた。今後の語彙研究に大いに貢献するであろう。さらに、複合語を構成する要素(特に下位要素「うちみる」の「みる」など)は、分割して、見出し語として掲げることにより、検索の便を図った。本書の付録として、本文テキストデータと語彙テキストデータを収めたフロッピーディスクを添付することにより、最近、国語学の領域で使用者が増えているパソコンを用いての語彙検索をより柔軟に行えるようにし、語彙研究において新しい視野を展開できるようにした。

全2冊・A5判・FD付・上製本・定価24,000円

※お求めはお近くの書店かまたは直接当社まで。